

(国語)

「活用する」力をつける説明文読解の指導 —ルーブリックを取り入れた授業実践の充実—

大阪市立池島小学校 学力向上部

1. 研究主題設定の理由

本校の校区には、児童養護施設があり、過酷な生い立ちを背負う児童がいる。乳幼児期からの子どもたちのおかれてきた状態から、他人との信頼関係を結ぶことは容易なことではない。学習場面だけでなく日常生活のあらゆる場面において相手に伝えたいことがあったり、けんかになったりした時に、イライラしてしまい、自分の気持ちを暴言や暴力でしか表現できない実態がある。また、「何のために学習しているのか」がつかめず、学習への興味や関心・意欲を維持することができない児童の存在も大きい。

そのような課題の解決を図るために、国語科の学習を通して、児童が「言葉のもつよさ」に気付き、言葉を使って自分の思いや考えを伝えられる経験を促したい。また、正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成するだけでなく、児童が言葉のもつよさを認識し、その力を日常生活にも活かしていけるような指導を目指したいという思いから、今年度の研究主題を『「活用する」力をつける』ことに設定した。

2. 研究の趣旨

本校の実態から、単元の導入時に学習の見通しをもたせることができれば、現状の改善につながるのではないかと考え、昨年度よりサブテーマを「ルーブリックを取り入れた授業実践」として研究を推進した。今年度は、昨年度の課題を改善し、さらに研究を深めるべく、『「活用する」力をつける読解の指導—ルーブリックを取り入れた授業実践の充実—』をテーマに研究を推進した。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点①主体的・対話的で深い学びの実現

主体的・対話的で深い学びの視点に立った説明文教材の授業実践を通し、児童の「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の育成を目指す。

視点②パフォーマンス評価を取り入れた評価方法

知識やスキルを使いこなすことを求めるような評価方法で、作文やレポート、展示物といった完成作品や、スピーチやプレゼンテーションといった実演を評価する。パフォーマンス評価を取り入れることで、ペーパーテストなどではかる「できる/できない」など二極化された評価のみでなく、児童の「活用・応用・統合する」力を評価する。

視点③ルーブリックを取り入れた授業実践

視点②のパフォーマンス課題をルーブリック（度合いを示す数レベルの尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語からなる評価の基準表）に照らし合わせて評

価する。

視点④言語活動の整備

- ・話型指導 ・「話す・聞く」時の約束など基本的な学習規律の定着
- ・読書活動の推進 ・詩の暗唱 など

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- ルーブリックを設定し、全員が B 評価に到達できるような単元展開を考える中で、育てたい見方・考え方が明確になり、結果的に児童の読む力を書く・話す力に活用させることができた。読み書きを複合させたパフォーマンス課題を設定したことが思考力と表現力の育成につながった。
- ルーブリックを活用することで、児童を必ず B 評価へ到達させるための授業展開や、C 評価になりそうな児童への手立てを考えることができ、指導者の授業改善につながった。また、B 評価に到達した児童には A 評価に挑戦させることで、もてる力を存分に発揮させることができた。
- 第 I 次第 1 時で教師モデルのパフォーマンス課題を見せることで、児童に学習のゴールの具体的なイメージをもたせることができた。単元を通して B 評価に到達するための学習計画を設定し、第 II 次以降では「今取り組んでいる学習がルーブリックのどこにあたるのか」常に現在地を確認させた。第 III 次では、児童自身がルーブリックを活用し、自己評価や相互評価をすることができた。
- ルーブリックを児童と共有したことで、児童は自分がどこまで頑張れそうか見通しをもって学習に取り組むことができた。また、よりよい評価を目指したいという気持ちから、普段よりも意欲的に学習に取り組む児童も多かった。「こうしたら A 評価になるかな。」とルーブリックを意識して自身の課題に取り組んだり、「～ができたから A 評価だ。」と自己評価にいかしたりしていた。A 評価に到達する児童が指導者の予想より多くなった実践があるのも、ルーブリックの共有がその一助になったのではないかと考えられる。
- 5 つの言語意識（相手意識、目的意識、場・状況意識、方法意識、評価意識）を吟味してパフォーマンス課題を設定したことが、児童の意欲と学習の質の向上に効果的であったと考えられる。特に、「〇〇に見せるために」という相手意識をもってパフォーマンス課題に取り組ませたことも意欲につながった。大人に見せる為に表現を工夫したり、低学年に見せる為に簡単な言葉に言い換えたりといった工夫をする様子も見られた。また、低学年に見せる課題では、見る側の学びにもつながったと考えられる。

(2) 今後の課題

- ルーブリックの指標と指導事項の整合性や、段階を分ける内容（量か質か）を吟味する必要がある。また、指導者自身が本時はルーブリックのどこにあたるのか、現在地を自覚した上で指導にあたることも重要となる。
- ルーブリックを提示することにより、自分の実力と見合わない評価を目指す児童もいた。いきなり A 評価を目指すのではなく、まずは確実に B 評価に到達し、さらに A 評価を目指すような単元展開にしたり、ルーブリックの提示の仕方を工夫したりすることが重要である。